

障害学とカルチュラル・スタディーズについての一考察

曾 和 信 一 *

A Consideration about the Disability Studies and Cultural Studies

Shin-ichi Sowa

本稿では、まず荘子の説く主要なキー概念のひとつである無用之用と万物斉同とは何かについて触れた。その概念を戦後のわが国の障がい児の「福祉と教育」の草分け的存在である糸賀一雄と、その理念を発展的に継承した伊藤隆二氏の言説と関わって展開した。それに次いで、障害学について考察する前提として、わが国の障害学の形成に影響を与えた青い芝の会とIL運動という障がい者の運動について言及した。そして、障害学について論及していく際に、その理論的な枠組みに大きな影響を与えた先行研究のひとつとして、カルチュラル・スタディーズとは何かについて論じたうえで、その研究の視点から、障害学とは何かということについて言及したところである。

Key words: 無用之用、「自立と共生」、障害学、カルチュラル・スタディーズ、「障害」の社会モデル

はじめに「無用之用」について

そもそも「無用之用」とは、荘子の『人間世篇 第四一八』に表され、人口に膾炙された言葉である「人皆知有用之用、而莫知無用之用也（人は皆有用の用を知るも、無用の用を知ることなきなり）」に由来するものである。その言葉を現代語に置き換えると、人は皆有用なものが有用で役に立つことは知っているものの、一見無用とされているものこそがその実において役に立つことを知らないということである。⁽¹⁾

荘子の言う無用とは、一般的な意味での役立たずで、使い道のないことを指したものでないことはいままでもない。そうではなくて、一見何の役にも立たないと思われ、そのように見なすことそれ自体が人間的なさかしらといえる分別知そのものであり、その分別知を取り去っていくための大切な働きをしている概念であるといえる。なお、分別知とは、仏教用語で邪見や俗念に妨げられ、真理を悟ることのできない無知を意味する「無明」に近い言葉である。そして、仏教では、その分

別知を認識して超える状態を「無分別智」という真理を説く概念で表している。その意味において、「無用之用」と「無分別智」とは一脈相通じるものがあるといえるのではないか。

また、「無用之用」という故事成語は、「胡蝶之夢」（その昔、壮子は自分が蝶になり、楽しく飛び回る夢を見て目覚めたが、自分が蝶となった夢をみたのか、蝶が自分になった夢をみているのか、夢と現実の区別がつかなくなったように思えるが、自分と蝶とにはきっと区別があり、こうした移行を物化と名づけた。）という比喩に繋がってくる考え方でもある。⁽²⁾ その物化について、「化して物となる」ということから、元においてはひとつであることが含意されている言葉である。

そのこととの関連で、荘子は「万物斉同」を説いているが、その概念は、全てのものは斉しく同一と見なす自分が絶対者であるといった意識をもって万物に差別を設けないが、その絶対者も万物のひとつにすぎないという相対化した認識が大切であるといった考え方である。万物斉同という境地において、夢と現実、生と死といった区別がなくなり、すべてが包摂されるものだが、「化」の表れとしての姿や形を現象的に有したものである。

* 四條畷学園短期大学 保育学科

莊子の説く物事の真実としての「道」の観点から捉えたと、万物は等価であるとともに相対的なものであり、生と死の双方とも「道」の表す姿の一面であるといえる。

1、「この子らを世の光に」から「この子らは世の光なり」へ

前述した無用之用と万物斉同という莊子の思想と関わらせて、障がい⁽³⁾者・児の「福祉と教育」の問題について考えていくことにしよう。

第二次世界戦争⁽⁴⁾後、わが国の障がい児の「福祉と教育」に関わる思想を切り開く草分け的な存在のひとりとして、糸賀一雄が挙げられよう。1963（昭和38）年に、糸賀は重症心身障がい児の施設であるびわこ学園を創設した。彼は、社会福祉の実践を通して紡ぎ出した自らの福祉の思想について、次のように言及している。

この子らはどんなに重い障害をもっている、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間とうまれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも、立派な生産者であるということ、認めあえる社会をつくろうということである。「この子らに世の光を」あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。「この子らを世の光に」である。この子らが、うまれながらに持っている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬということなのである。⁽⁵⁾

「重症な障害をもったこの子たち」は、慈恵の福祉の対象として施しを受ける存在ではなくて、自ら輝くその素材に一層の磨きをかけるとともに、人格発達の権利をもち個性的な“自己実現”を図ろうとする存在ではないかという問題提起を行った。重症心身障がい児を役立たずで、そのままでは無価値で使い道のない「無用」な存在と見なし、そのような彼らに憐憫の情をかけることで得々としている私たち一人ひとりのさかしら（分別知）なあり方を問い直そうとしたといえる。

糸賀にとっての発達とは、できないことをどのようにしてどこまですればできるようになるのかということにとどまらずに、その人なりに人間になっていくという意味での人間形成の全過程を指し示しているものである。換言すれば、人間の被形成と自己形成の弁証法的な全過程としての教育（人間形成）と関わっての発達にバイアスをかけようとするものの見方、考え方であるといえる。その当時、多くの重度、重症の障がい児に対して、学校教育法で規定していた就学の猶予・免除規定が適用され、それに何ら疑問を差し挟まなかった教育状況に、人格発達の権利保障という視点でもって一石を投じたのである。

「この子らを世の光に」という糸賀の福祉の思想を発展的に継承しようとする伊藤隆二氏は、「この子らは世の光なり」という福祉観を提示している。

伊藤氏は障がい児の「社会的処遇」について歴史的に四つの時代区分を設けている。一つは「虐待」の時代であり、二つは「保護」の時代で、三つは「この子らに世の光を」の時代である。そして第四には、糸賀の提起した「この子らを世の光に」の時代がはじまるという。しかしながら、伊藤氏は自らの思想が糸賀の「この子らを世の光に」という思想とは違うものであるとして、次のように言及している。

「この子らを」というとき、われ（または、われわれ）は主体で、「この子ら」は客体になる。主体が客体に働きかけ（あるいは操作し）、「世の光に」まで高めてやるのだという発想には、ある種の傲慢さがあるし、「この子ら」の本質への誤解がある。また、「この子らを世の光に」というとき、まだこの子らが「世の光」であることを認めていない。そこで教育し、きたえ、みがきをかけて、やっと世の光になりうるのだという見方である。わたくしは、この子らと長く深くかかわっているが、この子らは生まれながらにして「世の光」だと知った。正確にいうと、生まれたときから死ぬときまで、いや死んでもなお世の光でありつづける。この子らは（そのまま）世の光である」と確信したわたくしは、これまでの「この子ら観」を根本から改めたいのである。つまり「この子ら」は主体であって、世を照らしつづけているのである。⁽⁶⁾

長年障がい児の教育に関わってきた伊藤氏は、「この子らは（そのまま）世の光である」といったように、哲学でいうところの存在論の立場から障がい児を捉えている。確かに、私たち人間は「人間になる」に先立って「人間としてある」という存在であることはいうまでもない。伊藤氏にとって、障がい児が発達するとかしないとかにかかわらず、人間存在として万物斉同であると説いているといえよう。つまり、障がい児が「人間としてある」ということそのものに価値が認められるという意味での存在価値があり、そのことを認めることが大切になってくる。

しかしながら、糸賀の指摘する人間形成への働きかけこそが教育の論理であり、教育哲学としての価値論と伊藤氏の説く存在論の両者が相互に媒介しながら、統一して把握した論理の展開の方がより建設的な議論となってくるといえる。更に言えば、障がい児の「教育と福祉」の問題の解決に携わってきた先人の問題提起を受けて、「（障がい児を含む）一人ひとりの子どもとともに世に光を」照射していくことが大切となってくる。障がい児への社会の冷たい眼差しと、その闇の深さに思いを馳せれば馳せるほどに、人の世の四隅を照らし出す“光”の必要性こそが切実に求められてくるのではないだろうか。

2、障害学とカルチュラル・スタディーズをどのように捉えるか

“Nothing about us without us”（「私たち抜きにして、私たちに関することを決めないで」）という言葉に表象される障がい当事者を中心とする運動における分水嶺として、1970年代に「青い芝の会」に結集した脳性マヒ（CP: cerebral palsy）者の運動がある。1980年代には、アメリカ合衆国⁷⁾での自立生活（IL）運動の影響とも相まって、わが国においても障がい当事者を中心とする自立生活運動のうねりが高まっていくようになっていった。1990年代になると、ろう当事者によるろう文化運動が刮目されるに至った。2000年代には、1986年に発足したDPI（Disabled Peoples' International: 障害者インターナショナル）日本会議を中心に、障害者差別禁止法案の提起や障害者の権利条約の日本政府の批准に向けて、障がい者運動に取り組んできた。

他方において、それら一連の障がい当事者を中心とした運動とも関わって、1980年代にニューアカデミズムの台頭があり、1990年代には人文科学や社会科学における学際的問題領域の研究が活発になされた。そこでいう学際的問題領域研究とは、カルチュラル・スタディーズをはじめとして、障害学、環境学、平和学、国際学、女性学、レズビアン／ゲイ・スタディーズ、クイア・スタディーズ（第三波フェミニズムとしての同性愛の研究）、歴史社会学など、「〇〇学」（〇〇スタディーズ）といったように、特定の学問の領域を超えた思考、研究を意味したものである。また、介護の社会化のひとつの方策としての介護保険の導入を契機とした老人介護の問題、バリアフリーに係る法制度化と関わっての障がい者介助の問題、1986年に制定された精神保健法により謳われた人権の尊重とその擁護としての精神医療の問題なども、学際的研究における問題領域のテーマとして取りあげられるに至った。

前述した障がい当事者を中心とする運動の展開と、それに触発されてアカデミズムの世界でも、英国発のカルチュラル・スタディーズを理論的枠組みのひとつとして、英国とアメリカ合衆国で開花したディスアビリティ・スタディーズ（disability studies）が、1990年代後半になると、わが国において障がい当事者を中心とする障がい関連の研究者によって障害学として紹介され、表舞台に登場してきたのである。

2-1 わが国における障がい者運動について

思うに、わが国における障がい者運動の歴史と現在を梗概するだけでも、本稿での紙幅が尽きかねないといえる。そこで、まずわが国の障がい者運動の一翼を担った青い芝の会の主張と、重度障がい者の生き方における自己選択と自己決定を目指す自立生活（IL）運動に焦点を絞って、考察していくことにしよう。

脳性マヒ当事者を中心として活動してきた組織である青い芝の会は、1957年に結成され、1963年には全国青い芝の会へと結集していった。そこでいう青い芝の会という名称について、「すべての脳性マヒ者の更正と親睦の為の社会福祉団体で、脳性マヒのみんなが手をつなぎ踏まれても踏まれて

も青々と萌えていく芝のように立ち上がろうとする会」に由来するものである。青い芝の会は「脳性マヒ者の更正と親睦の為の社会福祉団体」であるという由来からもわかるように、その発足当初は親睦を目的とした社会福祉団体の色彩が濃厚であったといえる。

1960年代後半になると、彼ら重度の障がい者は、なぜ「収容」施設や在宅での生活を余儀なくされ、公共の場から閉め出され、地域での自立した生活が困難なのかといった問題提起を健常者中心の社会に対して行っていた。自分たち車いす使用者にとって、なぜ電車やバスなどの交通機関が自分たちの移動手段にならないのかといったように、障がい者のおかれている「問題としての状況」に異議申し立てをする運動を展開していった。

そのような青い芝の会の活動が社会的に大きく注目されるに至る契機として、親の手による障がい児の殺害事件への告発の運動があった。とりわけ、1970（昭和45）年に神奈川県横浜市で母親の重症の脳性マヒ児殺しに対して、懲役2年執行猶予3年の判決が出されたことへの告発の取組みに求められる。その判決の内容と結果を踏まえて、青い芝の会の横塚晃一氏は次のように指摘している。

この「施設がない故の悲劇」「可哀そうな母親を救え」という論調はそっくりそのまま今回の事件に受け継がれた。これに反発して「罪は罪として裁け」「障害児は殺されるのが幸せか」「殺人を正当化する考えから作られた施設とは殺人の代替ではないか」「重症児『殺されてもやむを得ない』とするならば殺された者の人権はどうなるのだ、そして我々障害者はおちおち生きてはいられなくなる」というような我々の生存権を主張した運動はまさに前代未聞と言われ、なる程そうであったか、どうして今まで気づかなかったのだろうという心ある人々の共感を得、すすんで我が会に協力を申し込む人々が多数現われた。そして新聞・雑誌に書かれ、NHK テレビ「現代の映像」にまでとり上げられた。⁽⁸⁾

横塚氏は、神奈川県での母親による障がい児殺害事件の動機ともなった「この子はなならない。こんな姿で生きているよりも死んだ方が幸せだ」という裁判の供述に見られる殺意こそが問題の起点であると指摘している。そして「なおるかなお

らないか、働けるか否かによって決めようとする、この人間に対する価値観が問題なのである。この働かざる者人に非ずという価値観によって、障害者は本来あってはならない存在とされ、日夜抑圧され続けている。」と、その事件に潜む問題点を剔出している。⁽⁹⁾

その神奈川県での母親の重症児殺しに対して、青い芝の会神奈川県連合会による厳正な裁判の要求運動を進めていった。その過程で、全国青い芝の会は、「われわれは強烈な自己主張を行なう」「われらは愛と正義を否定する」という具象化したテーマ（障がい者運動の活動方針となる綱領）を紡ぎだし、行動宣言という形で告発型の問題提起を行った。青い芝の会の活動は、障がい者・児の権利保障中心の既存の障がい者運動にある種のインパクトをもたらしたといえよう。その会の行動宣言の内容は次の通りである。

1、われらは自らがCPであることを自覚する。

われらは、現代社会にあって「本来あってはならない存在」とされつつある自ら位置を認識し、そこに一切の運動の原点をおかなければならないと信じ、且つ行動する。

1、われわれは強烈な自己主張を行なう。

われらがCP者であることを自覚したとき、そこに起るのは自らを守ろうとする意志である。われらは強烈な自己主張こそそれを成しうる唯一の路であると信じ、且つ行動する。

1、われらは愛と正義を否定する。

われらは愛と正義のもつエゴイズムを鋭く告発し、それを否定する事によって生じる人間凝視に伴う相互理解こそ真の福祉であると信じ、且つ行動する。

1、われわれは問題解決の路を選ばない。

われらは安易に問題の解決を図ろうとすることがいかに危険な妥協への出発であるか、身をもって知ってきた。われらは、次々と問題提起を行なうことのみわれらの行いうる運動であると信じ、且つ行動する。⁽¹⁰⁾

横田氏は、「われらは愛と正義を否定する」というテーマについて、障がい当事者の立場から次のようにコメントしている。

エゴを原点とした「親」の「愛」によって

私たち「障害者」はどれ程の抑圧、差別を受けているか。しかも、「愛」という名分の下にどれだけの「障害者」が抹殺されているか。(中略)今こそ、私たちは「愛」を否定しさらなければならない。「愛」の本質に潜むエゴを見据えなければならない。そして、所詮自己執着から逃れ得ない人間の哀しみを確認し、その時点からの叫びをあげなければならないのだ。(中略)「正義」によって疎外され、抑圧される「障害者」である私たちが何故「正義」を肯定しなければならないのか。私たちは「正義」が絶対多数者側の論理である以上、断固としてこれを否定しなければならないのだ。「愛」と「正義」の否定、これこそが「障害者」解放の基本的な思想であり、これを血肉化した精神をこそ「障害者」は持つべきであろう。⁽¹¹⁾

横田氏にとって、『愛』という名分の下にどれだけの『障害者』が抹殺されているか」ということの例証として、前述した神奈川県での母親による障がい児殺害事件などを挙げている。そのことと併せて、1960年代半ばから70年代初頭にかけて、兵庫県公衆衛生部では、「不幸な子どもの生まれない対策室」を設け、「先天的な異常をもって生まれる不幸な子ども」が生まれてくることを未然に防ごうとする選択的中絶の施策を推進したことが挙げられる。その施策に対して、青い芝の会は、『障害児』は不幸な子どもである」ということで、障がい者・児を排除し抹殺しようとする「健全者」のエゴイズムを「内なる優生思想」と呼んで、批判し抗議を行った。

この優生思想について、人間の理性でもって判断すれば否定的にならざるをえないことはいうまでもないが、「不幸な子どもの生まれない」施策に見られるように、今日に至るまで優生思想が根強く残っているといえよう。そのことについて、時の権力を担う政府は、最近まで人々が障がいの発生防止に込める意味合いを絡めとるようにして、人々を強権的（ハード）であるよりもソフトに管理し、合意（consensus）に基づく支配を貫徹しようとしてきたことが挙げられる。その管理の“見えざる手”の中で、人々が支配の仕組みに巧みに取りこまれ、むしろそれを下から積極的に支え、「絶対多数者側の論理」を自ら取り込んできたからこそ、「内なる優生思想」としてその思想は生きなが

らえてきたといえる。

障がい者への差別意識は、「愛」と「正義」という衣に纏われ、絶対多数者としての非障がい者である健常者の「善意」によって形づくられるだけに、陰湿化せざるをえなくなる。まさに善意によって舗装された道は地獄の道へと通じていることへの覚醒の必要性を、「われらは愛と正義を否定する」というテーゼでもって表現したといえるのではないか。

1980年代になると、アメリカ合州国で1970年代に展開した自立生活（IL）運動（movement of Independent Living）の影響とも相まって、わが国においても障がい当事者による自立生活運動が繰り広げられていった。その当時のアメリカ合州国のリハビリテーション界の主流をなす考え方は、経済の効率性を重視する立場から、障がい者の経済的職業的自活の遂行とADL（Activities of Daily Living）の向上による身の自立を目標に掲げたものであった。それらが困難な重度の障がい者は自立が難しいと判断され、隔離的な施設などでの終生に亘る保護が必要であるとされた。そのような障がい者のおかれた状況に対して、隔離的な施設での生活から地域での自立した生活への転換を障がい当事者が訴えることで、新たな自立観の確立が必要ではないかという問題を提起した。

定藤丈弘氏は、その経済的職業的自活と身辺自立を重視する自立観に対して、IL運動の考え方を次のように論及している。

障害者のIL運動の理念は、これらの伝統的な自立観の問題性を鋭く指摘し、身辺自立や経済的自活の如何にかかわりなく自立生活は成り立つ、という新たな自立観を提起したのである。例えば、「障害者が他の手助けをより多く必要とする事実があっても、その障害者がより依存的であることには必ずしもならない。人の手助けを借りて15分かかって衣服を着、仕事に出かけられる人間は、自分で衣服を着るのに2時間かかるために家にいるほかはない人間より自立している」という有名な自立生活の代表的規定は、これまで絶対視されていた日常生活動作の自立を相対化しただけでなく、それとリンクして重視されていた経済的自活論をも相対化して、日常生活動作自立（ADL自立）から、その障害に適した生

活全体の内容（例えば QOL）を充実させる行為を自立として重視する方向を明らかにしたのである。⁽¹²⁾

「人の手助けを借り」ることによって、生活全体の質を充実させていくとともに、自立生活を営む権利を行使するというものの見方、考え方は、その当時の自助努力を中心とする支配的な社会意識に基づく障がい者観を大きく転換していく契機となった。

IL 運動が提起した自立観を受けて、障がい当事者のひとりである牧口一二氏は、「健全者の自立と障害者の自立」の問題を次のように提起している。

私に「ヒト（人）」でなく「人間」でありたい、と気付かせてくれたのは、両手両足に障害をもつ人たちの「自立運動」であった。世間から「自立できない」と思われている人たちによる「自立宣言」は、この発想だけでも健全者社会への痛烈な皮肉が効いていて面白い。しかも、ここ 15 年間の障害者による自立運動の地道な実践は、確実に地域社会に根付きはじめた。つまり、障害者の自立とは、自分のできないことや苦手なことは、他者の力を借りるのである。

従来なら、親亡き後は施設に行くしかないと思われていた障害者たちが、全国のあちこちで自分の表札を掲げた家に住みはじめた。そこで地域に住む人びとを介護者として自分の暮らしに巻き込み、人間関係を広げ、深めていく自立方法なのである。⁽¹³⁾

牧口氏の言う自立観とは、障がい者自身にとって、「自分のできないことや苦手なことは、他者の力を借り」ることが必要であり、介護者の手助けを得て、その結果として人間関係を豊かにしていくことができるという考え方である。換言すると、障がい者にとっての自立とは、他者の力を借り、多様な人間関係を取り結びながら、QOL（Quality of Life）としての生活全体の内実を深め、自らが望む生活のあり方を主体的に選びとって生きるとともに、自らの生き方を自らの責任において決めていくということでもある。その意味で、「自立（independent living）」と「共生（living together）」とは切り離しがたいものであるといえる。換言すると、「共生」のない「自立」は真の「自立」ではなく、「自立」のない「共生」は本当の「共生」で

はないといえる。つまり、「自立」と「共生」は表裏一体をなした「自立と共生」の関係として捉えることで、共に生きようとする仲間との“いま、ここで”の生活を充実したものにしていくことができるのである。

IL 運動は、それまで隔離的な施設での生活を余儀なくされ、自由の制限をはじめ「人間」として生きる諸権利を脅かされ奪われてきた重度の障がい者を含めて、障がい当事者が自らの生き方を自らが選びとり、決めていくといった行為としての自立を支援するものである。その結果として、障がい者は通常の意味での人間的な家庭生活や地域社会での自立生活を営むことへの市民権を漸次獲得してきた。そして、そのことは、北欧から発信され、グローバルな規模で展開されたノーマライゼーションの思想とともに、QOL の向上を重視するリハビリテーションやウェル・ビーイング（well-being）としての社会福祉の理念に重大な影響を与えたといっても過言ではないだろう。

2-2 カルチュラル・スタディーズを考える

本稿の主要なテーマである障害学について論及していくに先立って、その「学」の理論的な枠組みの形成に大きな影響を与えた主要な先行研究のひとつとして、1964 年に英国のバーミンガム大学に設立された現代文化研究センター（CCCS—Centre for Contemporary Cultural Studies）に集う研究者グループによって発信されたカルチュラル・スタディーズ（Cultural Studies）について考察していくことにしよう。というのは、ADL 及び経済的職業的自立を目標としたリハビリテーション医学や「ゆりかごから墓場まで」の社会保障制度の充実を意図したソーシャル・ウェルフェアの対象として捉えられ、研究されてきた「障害」の捉え方について、社会の側からその問題点を指摘し、その問題解決の方向性を示そうとするとき、カルチュラル・スタディーズ（以下「CS」と略す）の視座が重要となってくるからである。そこで、CS とは何かということについて、その概要を考えていくことにしよう。

CS について考察していく際に、その代表的研究者のひとりであるポール・ウィリス（Paul E. Willis）が著した『ハマータウンの野郎ども—学校

への反抗・労働への順応』を切り口に検討していくことにする。ウィリス自身がバーミンガム大学の CCCS のセンター長であるスチュアート・ホール (Stuart Hall) のもとで学び、働いた一員である。その『ハマータウンの野郎ども』の「生活誌」の箇所において、筆者と子どもたちの間で、次のようなインタビューの場面がある。

〔グループの面談で一教師について〕

ジョウイ ……教師はおれたちを処分できる。教師はおれたちよりもえらいんだ。やつらにはおれたちよりもでかい組織がひかえてる。おれたちのはタカがしれてるけど、教師はでっかい制度を味方にもってるものな。それでも、言いなりになるってのはシャクじゃないか。なんていうかな、権威づくってのはムカツクね。

エディ 教師だからっていうだけで、教師は自分たちのほうがえらいし、力もあるんだって思ってるのさ。でもほんとうはさ、教師っていってもなんでもないのさ。ただのふつうの人間じゃないかよ、なあ。

ビル 教師って、よほど何でもできると思ってるんだ。そりゃ、おれたちよりはできもよくて、えらいかもしれないけどさ、やつらそれよりもっとえらいって思ってるんだぜ、そんなことないのにさ。

スパンクシー ファースト・ネームで教師を呼びつけにできたらどんなにいいだろうな。やつら、まるで紳さま気どりだもんね。

ビート 紳さまならよほどましたよ。⁽¹⁴⁾

ウィリスは、その著書の中で、イギリスの労働者階級の「落ちこぼれ」の「野郎ども (the lads)」(男子中等学生) を対象に、グループの面談を行った。それを通して彼らと深く関わり、彼らが語ったことへの分析を通して、その社会的文脈の中で彼らを多面的かつ重層的に理解しようとするエスノグラフィー (ethnography: 生活誌) の手法を用いて、彼らの日常生活と卒業後の進路を記述した。その手法によって、彼らが中流階級的な学校のもつ価値観を体現する“学校文化”とそのあり方を拒んだ。そして労働者階級の文化ともいえる“反学校文化”をどのようにして作りだし、「男らしい」肉体労働にバイアスのかかった労働者階級のメンバーになっていくのかということを記録した。

それとともに、その分析を通して、有効な社会変革にどのように結びつけばよいのかということをも、「野郎ども」をケーススタディにして問いかけた。そのようにすることで、国家や社会に権力を及ぼし、現に行使している階級による社会的支配を批判する対抗文化論を提起したのである。

ウィリスの提起した問題を踏まえていえば、CS とは、生活者の日常的実践 (日常生活の中で営んでいる文化的実践) を対象として、その解釈をめざすエスノグラフィックな側面を有する研究であるといえる。また、社会的、政治的、文化的問題を実践的に分析し、解釈することで、「文化」などの上部構造に対する下部構造としての経済が上部構造を制約し、その上部構造が変革されるという経済決定論的なマルクス主義の理論から距離を置くことで、その文化的要素を重視する研究でもある。そこでいう社会的、政治的、文化的問題とは、社会階級、イデオロギー (社会的意識形態)、エスニシティ (民族に固有の特性) を含む人種、ジェンダー (社会的、文化的につくられた性のありよう) などの問題であるが、CS はそれらの問題とある特定の現象がどのように関連しているのかということに焦点が当てられるのである。

それらのことと併せて、CS とは何かについて、その (学際的) 問題領域の研究を切り開いた泰斗といえるスチュアート・ホールは、「カルチュラル・スタディーズとは、なにより今の、われわれ自身のここでの問いであるはずだ。すなわち、カルチュラル・スタディーズを差異を通して自分たちで思考すること。(傍点原文のまま)」であると言う。⁽¹⁵⁾ 言い換えると、分析対象とその解釈の対象となる文言の特性ともいえるテキストを解釈する「われわれ自身のここでの問い」をコンテキスト (言葉のニュアンスを変化させる文脈) において発することで、CS を「思考する」営為として捉えることであるということだろう。

わが国における CS の研究者のひとりである吉見俊哉氏は、急進的かつ根源的な意味でのラディカルな立場に立って、CS とは何かということについて次のように論及している。

マス・メディアや消費文化、都市空間とサブカルチャー、文学的生産と読書、広告や映像における人種やジェンダー、グローバル化とメディア・ナショナリズム、アイデンティ

ティの文化政治などについての批判的かつ内在的な理解の方法として、文学研究と社会学、人類学、歴史学、美術史、映画研究などを横断する批判的な知が、現在のわれわれにはどうしても必要である。同時にそれは、支配的現実である大衆文化の表層を扱い、ヘゲモニックな文化コードの周縁部や裂け目に異化や転覆、オルタナティブな歴史の可能性を探るものでなければならない。このような越境的な知のことを、わたしはとりあえず「カルチュラル・スタディーズ」と呼んでいる。(中略)変化はすでに既知の学問分野の境界をはるかに越えて起きており、いかなる知的冒険も、個々の分野を内破していかざるを得ないのである。このとき「学際的研究」などという安易な方便に身を委ねるのではなく、既存分野を解体していく戦略として、カルチュラル・スタディーズはひとつの有効な手段となるとわたしは考えている。⁽¹⁶⁾

吉見氏が論及するCSとは何かという定義を読み解くキーワードとして、“批判的な知”、“内破する知”及び“越境的な知”といった“知”のあり方へのラディカルな技法が挙げられよう。そこでいう“批判的な知”とは、制度化され、規範化された「既知の学問分野」のそれぞれの領域における“知”という言語表現の総体を意味する言説（ディスコース：discours）が産みだされ、消費され、フィードバックされる全過程への批判的な眼ざしを有するものである。

また、“内破する知”に関して、近代の知が侵略する側の一方的なコロニアル（植民地）的状況を現出するものというよりも、侵略される側との間に価値争奪を繰り広げてきたといえる。その結果として、侵略される側の「橋をわがものとする思想」（フランツ・ファノン）とその運動のヘゲモニー（Hegemonie：主導権）を掌握すべく、知のポストコロニアル（脱植民地）化の実現を図るために、社会的なものの外破による近代の知の解体ではなく、知の植民地化に至るプロセスを自らの経験と内面を刺し貫く問題意識でもって内破する道筋を明らかにしていく必要がある。

“越境的な知”について、それは「既知の学問分野の境界」の越境にとどまらずに、「文学研究と社会学、人類学、歴史学、美術史、映画研究など」

の境界における知の越境を意味したものであるといえる。“知”の相対化を志向するポストモダンの旗手のひとりであるミシェル・フーコー（Michel Foucault）のディスクールに準えれば、知に内在する権力が働くありとあらゆる境界の越境を射程に据えたものであろう。

結論的にいえば、“批判的な知”を“知”のあり様を論じる際の通奏低音として、“内破する知”から“越境的な知”へと向かう方向でもって、日常生活の中で営んでいる文化的実践としてのエスノグラフィックなフィールドワークの手法による批判的な問いかけこそが、CSを読み解くにあたって大切な視座となってくるといえる。

2-3 障害学を考える

ここでは、障害学とは何かについて、その先行研究者に学びながら、考察していくことにしよう。

学際的問題領域の研究のひとつとして、ディスアビリティ・スタディーズ（Disability Studies）は、1980年代前半にアメリカ合州国の“障害学の父”といわれるアーヴィング・ゾラ（Irving Zola）を嚆矢とするアメリカ障害学会の創設者たちによって始まった研究である。他方において、英国のマイケル・オリバー（Michael Oliver）たちが「障害」の社会モデルを中心とするディスアビリティ・スタディーズを発展させたといえる。わが国において、英米を中心として発展し変化してきたその学際的問題領域研究に触発されるとともに、障がい当事者の運動が提起してきた諸問題を明らかにすべく、1990年代後半において、障害学（ディスアビリティ・スタディーズ）が研究者によって紹介され、「障害」についての理論と実践に関心をもつ人々の耳目をひくに至った。

わが国で障害学という問題領域の研究を紹介したひとりである長瀬修氏は、障害学とは何かについて、次のように定義づけている。

障害学、ディスアビリティスタディーズとは、障害を分析の切り口として確立する学問、思想、知の運動である。それは従来の医療、社会福祉の視点からの障害、障害者をとらえるものではない。個人のインペアメント（損傷）の治療を至上命題とする医療、「障害者すなわち障害者福祉の対象」という枠組みからの脱

却を目指す試みである。そして、障害独自の視点の確立を指向し、文化としての障害、障害者として生きる価値に着目する。⁽¹⁷⁾

長瀬氏は、障害学を「障害を分析の切り口として確立する学問、思想、知の運動である」と定義づけている。そこで論じている「障害」について、「個人のインペアメント（損傷）」とディスアビリティ（能力「障害」）に大別されるものである。前者のインペアメントとは、目が見えないとか耳の聞こえが不自由であるといったように、個人の担う属性としての「障害」である。そのインペアメントとしての「障害」の治療、軽減・克服といった医療モデルからの脱却をめざし、そのカウンターモデルとして、社会の「障害」と「障壁」としてのディスアビリティと関わって、実践モデルとしての社会モデルのあり方を提起した。なお、医療モデルとは、医学で用いられる診断とそれに基づく治療の手順をクライアント（来談者）への援助過程で展開しようとする考え方に基づくモデルで、医学でいう「予診、診断、治療」といったスキーム（図式）を「インタークスタディ、社会的診断、社会的処遇」として置き換えて捉え、社会福祉の専門職の体系づくりを試みたモデルである。

長瀬氏とともに、障害学を世に広く知らせた石川准氏は、社会モデルとそのあり方について次のように言及している。

要するに社会モデルは、インペアメントからディスアビリティへと問題をシフトさせた。社会モデルは、本人が障害の克服のための責任と負担の一切を負わなければならないとするのではなく、社会が「できない」という問題を解決するための責任と負担を負わない状態を問題にすべきだと主張した。ディスアビリティとは、作為的、不作為的な社会の障壁のことであり、それによって引き起こされる機会の喪失や排除のことであり、だからディスアビリティを削減するための負担を負おうとしない「できなくさせる社会 disabling society」の変革が必要だと主張されたのである。⁽¹⁸⁾

個人の担う属性としてのインペアメントから社会の障壁としてのディスアビリティへと、「障害」をシフトさせて捉えようとする実践モデルとしての社会モデルによって、その「ディスアビリティ

を削減するための負担を負おうとしない『できなくさせる社会 disabling society』の変革」を射程とした「学問、思想、知の運動」が障害学であるといえよう。言い換えると、障害学とは、ディスアビリティが社会の障壁であるとする、その障壁をつくりだしてきたのが私たちが暮らす社会であり、そうであるからこそ、そのような社会をつくりかえることができるというものの見方、考え方に立った実践的な「知の運動」である。

その「知の運動」でいう「知」とは、健常者を中心にして組織化されてきた“知”に対抗して、CSの箇所でも触れた“批判的な知”、“内破する知”及び“越境的な知”といった“知”のあり方と密接に関わったものであろう。その「知」の体系こそが科学（science）であるが、科学をして真に科学たらしめる基底には、人間の良心、誠実さ（conscience）といったことが求められてくることはいうまでもない。つまり他者の痛みや苦しみへの共感をベースにしてこそ、障害学がそのレーゾン・デートル（存立の根拠）を有するといえる。また、障害学が“学”としてのスタンスをとろうとするかぎり、「真理」の探究と社会的歴史的現実への批判精神が必要不可欠なものとなってくる。それと併せて、その学は、前述したような障がい者運動との関係をどのようにして、どこまでつくりだしていくのかが問われてくる。そのことと関連して、杉野昭博氏は次のように言及している。

障害学が「学」として成立するためには、政治運動におけるフランチャイズ（支持者）とは異なるものの、やはり、「学」としてのフランチャイズ（学ぶ者）が必要であることは言うまでもない。だとすれば、障害学は「学ぶに値する学術水準」を維持するとともに、できるだけ多くの人を「学ぶ者」として引き付けなければならない。1970年代の障害者解放運動も、多数の健全者支援者の前に、運動の担い手である障害者自身が埋没しがちであったという課題をもっていたが、それは逆に言えば、当時の運動が、それだけ多くの非障害者の関心と呼んだということでもある。つまり、障害者以外の人々に幅広い支持を広げたことが、それまでの障害者運動と70年代の障害者解放運動との相違であり、魅力でもあった。1970年代の障害者解放運動は、「新しい社

会運動」としての普遍性ととも、当事者運動としてのフランチイズをいかにして確保するかというジレンマを抱えていたといえるだろう。そして、そのジレンマは、そのまま現在の障害学へと引き継がれているように思う。⁽¹⁹⁾

障害学が「学」であるかぎりにおいて、「学ぶに値する学術水準」の維持は必要であるが、同時に既存の「学」の秩序の中に埋め込まれることなく、既存のそれを変革していく力となりうる関係性を創り出していくことが障害学に問われてくるといえる。

障害学は、その担い手が障がい当事者の研究者を中心として発展してきたといっても過言ではなかろう。言い換えると、第三者的立場からの代行政主義といったスタンスをとらずに、障がい当事者の視座を基本とした「障害」研究という性格を有した「学」である。とは言うものの、その担い手は障がい当事者だけではなくて、障がい者・児問題を自らの問題として受けとめ、その問題の解決に取り組もうとする人々ではないだろうか。そこでいう人々とは、障がい者はもとより、非障がい者である健常者を包摂するものであり、その障がい者と健常者を取り巻く社会的関係性を問うところこそが障害学にとって重要な問題となってくる。

このようにして見ていくと、障害学とは何かという規定について、その研究と実践に携わっている人々の数だけ、その捉え方の位相に微妙な相違が見られるといえよう。むしろ厳密にそれを定義づけて捉えるよりも、大枠において「障害」の社会モデルとよばれる理論的枠組みへの「われわれ自身のここでの問い」（スチュアート・ホール）を問題とする意識を分かちあうことが重要になってくる。また、障がい当事者及び健常者一人ひとりが担う個人のボランタリーなネットワークによって、その理論と実践を紡ぎ出していくことが必要となってくるという意味で、今後ともその発展と変化が期待される問題領域の研究でもある。

【注】

- (1) 金谷治訳注『莊子 第一冊』岩波文庫、144～146頁、2005年。
- (2) 金谷治訳注『同上』88～89頁。
- (3) 「障害者」の“害”が「さまたげとなるもの」として、

否定的な意味あいでは使われてきたという批判が関係各方面の一部からあり、人権尊重及び障がいを個性として捉える観点から“障がい”とひらがな表記に改めてきたところである。もっとも、表記上のルールとしては、“ひと”を直接的に形容する場合、“害”を“がい”と表記するとともに、法令・制度や固有名詞に関しては、そのままの表記とすると使い分けられるようになった。本稿で法令・制度や固有名詞を除いて、その文脈によって、“障がい”または「障害」と表記をしていくことにする。

- (4) 第二次世界大戦ではなくて、第二次世界戦争と表記した理由について、大戦とは戦争を行った勝者がその大国主義にねざして、戦争を合理化し讃美する際に使われ、来るべく戦争への勝利を高々と宣言するという意味あいでは使われてきた。が、その勝者だからといって、戦争の加害からは決して免れることはできず、戦争は人類への犯罪であり、最大の人権侵害であるという理由から、世界戦争と表記する。
- (5) 糸賀一雄『福祉の思想』日本放送出版協会、177頁、1969年。
- (6) 伊藤隆二『この子らは世の光なり』樹心社、223～224頁、1988年。
- (7) アメリカ合州国という表記について、本多勝一氏は『アメリカ合州国』という著書の中で、“合衆国”の“衆”が様々な人民や民族がひとつに融けあった理想社会であるかのような誤解を与えること、アメリカが弱肉強食の国であり、強者が“自由”にできる典型的社会であること、州によって法律や性格が大きく異なることなどの理由から、“合州国”と記している。その指摘にならない、“合州国”と表記する。
- (8) 横塚晃一『母よ！殺すな』すずさわ書店、30～31頁、1975年。
- (9) 横塚晃一『同上』31～32頁。
- (10) 横田弘『炎群—障害者殺しの思想—』しのめ発行所、87～88頁、1974年。
- (11) 横田弘『同上』95～96頁。
- (12) 定藤丈弘「障害者福祉の基本的思想としての自立生活理念」（定藤丈弘、岡本栄一、北野誠一編『自立生活の思想と展望』ミネルヴァ書房、8頁、1993年。
- (13) 牧口一二「障害者の自立と就労」（定藤丈弘、岡本栄一、北野誠一編『同上』）225頁。
- (14) ポール・ウィルス著（熊沢誠・山田潤訳）『ハマータウンの野郎ども 学校への反抗・労働への順応』筑摩書房、19～20頁、1985年。
- (15) スチュアート・ホール（本橋哲也訳）「カルチュラル・スタディーズの翼に乗って、旅立とう」（花田達朗、吉見俊哉、コリン・スパークス編『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社、21頁、1999年。
- (16) 吉見俊哉『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』

人文書院、29 頁、2003 年。

- (17) 長瀬修「障害学に向けて」(石川准、長瀬修編著『障害学への招待』) 明石書店、11 頁、1999 年。
- (18) 石川准「ディスアビリティの削減、インベアメントの変換」(石川准、倉本智明編著『障害学の主張』) 明石書店、25～26 頁、2002 年。
- (19) 杉野昭博『障害学 理論形成と射程』東京大学出版会、40～41 頁、2007 年。

【参考文献】

- (1) 金谷治『老子 無知無欲のすすめ』講談社学術文庫、1997 年。
- (2) 糸賀一雄『この子らを世の光に』柏樹社、1965 年。
- (3) 伊藤隆二『なぜ「この子らは世の光なり」か』樹心社、1990 年。
- (4) 寺ノ門栄『偽りよ死ね 脳性マヒ者の愛と闘いの記録』参玄社、1973 年。
- (5) 曾和信一『ノーマライゼーションと社会的・教育的インクルージョン』阿吽社、2010 年。
- (6) 牧口一三『何が不自由で、どちらが自由か』河合文化教育研究所、1995 年。
- (7) スティーヴン・ハンフリーズ著 / 山田潤・P・ピリングズリー・呉宏明 監訳『大英帝国の子どもたち 聞き取りによる非行と抵抗の社会史』柘植書房、1990 年。
- (8) ジャウディン・サルダー+ボリン・ヴァン・ルーン著 / 毛利嘉孝+小野俊彦訳『カルチュラル・スタディーズ』作品社、2002 年。
- (9) 本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波新書、2005 年。
- (10) 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉『内破する知 身体・言葉・権力を編みなおす』東京大学出版会、2000 年。
- (11) 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『越境する知 1 身体：よみがえる』東京大学出版会、2000 年。
- (12) 吉見俊哉編『知の教科書 カルチュラル・スタディーズ』講談社、2001 年。
- (13) フランツ・ファノン著 / 鈴木道彦、浦野衣子訳『地に呪われた者』みすず書房、1969 年。
- (14) 倉本智明『だれか、ふつうを教えてください！』理論社、2006 年。
- (15) 安積純子、岡原正幸、尾中文哉、立岩真也『＜増補改訂版＞生の技法 ― 家と施設を出て暮らす障害者の社会学』藤原書店、1995 年。
- (16) 大阪人権博物館編『リパティセミナー講演集 障害学の現在』大阪人権博物館、2002 年。

－ 2011. 3. 24 受稿、2011. 3. 25 受理－